マルパ・ワークショップ

茅ヶ崎市美術館 美術館までつづく道 第4回

2018.7.29　茅ヶ崎市美術館

茅ヶ崎市美術館　学芸員
藤川　悠

1 自転車用スロープを車椅子で滑りおりる和久井さん
2 海の家での一休み
3 視線の高さの違いを確認
4 感情マップをもとにキーワードを見つけ出す作業
5 フィールドワークをみんなでインスタレーションで表現

筆者が勤務する茅ヶ崎市美術館の周辺は細い道が入り組み、標識も少なく、迷いやすいことで知られている。実際に、迷ってしまい困ったという意見を受付で頂戴することもある。しかし、このような当館までの道程を“迷路のようで楽しんだ”という人が現れ、その人は視界の一部分のみ見えるという弱視の方であった。

これまで「迷う」「分からない」という言葉がネガティブな言葉として使われることが多かった中で、弱視の方によるこの発言はそれらを包み込むようで、筆者にとって驚きであった。そして、今回のプロジェクトの企画を考えるきっかけとなった。一見マイナスに捉えられやすい事柄を他者の異なる感覚や力をかりることで、何か良い方向に捉え方を変換することができないか。そのような思いから「道」をテーマに、これまでハード面で語られることの多かったアクセス問題について新たな切り口で取り組み始めたのが「美術館までつづく道」プロジェクトである。そして、異なる感覚を技や智恵をかりるにあたり、高齢者、障がい者、外国人など多様な人々を、デザインプロセスの最初から巻き込む「インクルーシブデザイン」の手法を活用した。

2018年の２月から約半年間かけ、美術館周辺をアーティストである「表現者」と、視覚障がい、聴覚障がい、車椅子ユーザーなど身体に不自由を抱える人や小さな子連れなど、異なる感覚をもつであろう「感覚特性者（* 1）」がセットになり、筆者を含むコアメンバーとともに道を歩き、迷い、遊び、道中でおこる様々な出来事を体験するフィールドワークを４回にわたり実施した。

今回紹介する７月29日（日）に実施した第４回目は、前日の台風12号が去り晴天に恵まれ絶好のフィールドワーク日和となった。感覚特性者（特性：車椅子ユーザー）である和久井真糸さんは以前茅ヶ崎に住んでいた時期もあり、コンパクトな電動車椅子を自由自在に操り、一人で車も運転されるアクティブで明るい女性。表現者は、アメリカ西海岸生まれのアーサー・ファンさん。自分が歩いた一日の道程の記憶をもとに作品制作を行っており、普段は理化学研究所で脳科学の研究をしているアーティスト。

フィールドワークの流れとしては、美術館周辺の道を一緒に歩き、主に感覚特性者の和久井さんが歩く様子を観察し、道中でおこる様々な出来事を体験する。美術館に戻ってからは、道中の出来事や気付きを参加者で確認しつつ、和久井さんのそのときの感情と照らし合わせた「感情マップ（*2）」を作成する。最終的には、気付きを価値に変えるであろう「キーワード」を見つけ出し、それをもとに簡単なアートワークを行った。

美術館を出発すると和久井さんは持ち前の明るさで同行者を先導しあえて狭い道を選び道を進んだ。道中では、190cm近いアーサーさんの身長と車椅子の和久井さんの視線の高さよって見える景色の違いを確認。そして、海へわたるための国道134号線の陸橋にさしかかると、和久井さんはスロープの方向に進むのではなく、通常歩行者が自転車を押して進むための幅の狭いスロープをあえて選び上り始め、下りる際も車輪がはみ出してしまうほどの狭いスロープを車椅子で颯爽と笑顔でくだっていった。そして、夏の時期にだけ現われる「海の家」へ砂に車輪をとられながらもぐんぐんと進んだ。その姿は、我々の想像をはるかに超え、アクロバチックな車椅子の動きは終始驚きの連続であった。美術館に戻り導き出されたキーワードは「狭い・低い・挑戦」。道を楽しむヒントがこのキーワードに隠されているようであった。１人で歩く道とは明らかに違う視点で茅ヶ崎の道を体験することとなったアーサーさんが、この体験をもとに今後どのように作品世界をみせてくれるのか楽しみな第４回となった。

マルパ・ワークショップ

茅ヶ崎市美術館 美術館までつづく道（展覧会へむけて）

2018.8.26　茅ヶ崎市美術館

茅ヶ崎市美術館 学芸員
藤川　悠

1 表現者たちの作品制作へ向けたプレゼンがスタート
2 展覧会に向けての集合写真
3 映像と音が振動で伝わる体感作品を探る金箱さん、原田さん、西岡さん
4 香りと音を組み合わせた表現を探る稲場さんと MATHRAX さん
5 自由な動きを絵画で表現するアイデアを話す原さん

2020年に向け、各地で障がい者や高齢者などマイノリティといわれる人々へ向けた様々な試みがなされている。そして、今回「美術館までつづく道」プロジェクトで活用した、高齢者、障がい者、外国人など多様な人々をデザインプロセスの最初から巻き込む「インクルーシブデザイン」の手法も各界から高い注目を集めている。今回のプロジェクトは、アートの表現にインクルーシブデザインの手法を活かすことができるかどうか実験的な試みである。構想から１年半、当館周辺で４回にわたりフィールドワークを実施した。その第１回は、メディアアーティストと音空間デザイナーと聴覚障がい者とともに歩いた「聴覚の感覚特性者と歩く道」(2018.2.25)。第２回は、画家と２才の子とそのお母さんとともに歩いた「小さな感覚特性者と歩く道」(2018.3.25)。第３回は、香りの研究者とメディアアーティスト、視覚障がい者と盲導犬とともに歩いた「視覚感覚特性者と盲導犬と歩く道」(2018.6.10)。第４回は、脳の研究者であるアーティストと車椅子ユーザーとともに歩いた「車椅子ユーザーの感覚特性者と歩く道」(2018.7.29)。この４回にわたるフィールドワークは、これから2019年の夏に開催する茅ヶ崎市美術館の企画展「美術館まで（から）つづく道」へとつづいていく。４組の表現者たちは、フィールドワーク後も感覚特性者とのやりとりをつづけており、展覧会に向けた作品制作へと歩みを進め始めている。その経過発表として、８月26日に近隣の美術館関係者を招いての報告会が行われた。表現者たちの作品構想は、どれもフィールドワークをもとに丁寧に組立てられており、美術館という場が頼ることの多い感覚である視覚のみならず、聴覚、触覚、嗅覚などあらゆる感覚を用いて鑑賞する新たな作品が展開されることが報告された。更に、展覧会では当館所蔵作品の中から萬鐵五郎、小山敬三、三橋兄弟（いとじ）治らが茅ヶ崎を舞台に描いた作品もあわせて展示を計画しており、当館が立地する茅ヶ崎を舞台に異なる時代を生きたアーティストたちの表現が交差する場となる。時代、分野、感覚のカテゴリーを越え、多様な人々を包括する試みの展覧会となる予定であり、当事者の技や智恵、特性を、アーティストが新たな表現活動へとつなげることで、これまで助ける側、助けられる側という両者の関係性にも揺さぶりをかけることとなるだろう。また、同調・共感・同情が求められることの多い現代において、障がい者、弱者、表現者、鑑賞者、マイノリティ、マジョリティの関係性の枠を越え、多様な人々が異なる感覚を持ち生きていること、その違いを認識し、尊重し、楽しむことで、一人一人が特性をもつ「感覚特性者」として、世界を捉え直す契機となることを期待している。来館者が美術館から出た一歩先につづく道が、これまでとは違う視点で捉えられることを目指したこのプロジェクトと展覧会は、人々の認識を変えるという美術の本質にも迫るものとなるだろう。

*1 感覚特性者…主に障がい者の感覚に焦点をあて、障がいとしてでなく、その人の特性として呼ぶ造語。メディアアーティストの金箱淳一が普段使用している言葉。
*2 感情マップ…インクルーシブデザイン手法の１つの行程。出来事を記した付箋をもとに、その出来事に対し当事者本人（ここでは感覚特性者のことを指す）の物事の捉え方や感情を、出来事のあった時間軸と感情の起伏軸で現わしていく方法。この方法では、周囲から想像する当事者の思いと当事者本人との意識の違いが明確になることがメリットといえる。

◆関係者リスト
フィールドワーク（第１回）
表現者:金箱淳一（メディアアーティスト／産業技術大学院助教）＋原田智弘（音空間デザイナー／ソラソレ堂）
感覚特性者：西岡克浩（美術と手話プロジェクト代表／特性：聴覚障がい）・和田みさ（手話通訳）・市川節子（手話通訳）
フィールドワーク（第２回）
表現者：原良介（画家）
感覚特性者：原そよ（２才女の子）＋原美帆（お母さん）
フィールドワーク（第３回）
表現者：稲場香織（資生堂グローバルイノベーションセンター香料開発グループ研究員）＋ MATHRAX〔久世祥三＋坂本茉里子〕（テクニカルドバイザー／グラフィックデザイナー／メディアアーティスト）
感覚特性者:小倉慶子（小説家／特性:視覚障がい）＋リルハ（盲導犬）
フィールドワーク第４回
表現者：アーサー・ファン（美術家／理化学研究所脳科学総合研究センター研究員）
感覚特性者：和久井真糸（エーラスダンロス症候群患者会／特性：車椅子ユーザー）
〈協力者〉
インクルーシブデザインアドバイザー:鎌倉丘星（(株)インクルーシブデザイン・ソリューションズ／特性：視覚障がい・呼吸不全・車椅子ユーザー）
記録：香川賢志（写真家）、金明哲（映像撮影）
谷津光輝、岡崎凌大（湘南工科大学学生）
〈主催〉公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団／公益財団法人かながわ国際交流財団
〈協力〉湘南工科大学総合デザイン学科／（株）インクルーシブデザイン・ソリューションズ
マルパ特設サイト：http://www.kifjp.org/mulpa